がん －癌－

膵がんについて －その1－

膵臓の解剖

膵臓は胃の後ろにある細長い臓器で、右側のふくらんだ部分を「膵頭部」、左側の細長い部分を「膵尾部」、膵頭部と膵尾部の間を「膵体部」と呼びます。膵頭部は十二指腸に囲まれており、膵尾部は脾臓に接しています。

膵臓の働き

膵臓には、たんぱく質、脂肪、炭水化物を消化分解する「膵液」という消化液を作る「外分泌機能」と、血液中のブドウ糖を細胞に取り込み、エネルギー源に変えて血糖値を下げる「インシュリン」というホルモンや、体脂肪や肝臓に蓄えられたグリコーゲンをブドウ糖に変えて血糖値を上げる「グルカゴン」というホルモンを作る「内分泌機能」の2つの働きがあります。

膵がんとは

膵液は、「膵管」という細い管の中に分泌され、細かい膵管は集まり「主膵管」という一本の管になり、肝臓で作られた胆汁という消化液が通る総胆管とほぼ同じ場所で膵頭部から十二指腸に注ぎます。

「膵がん」のうちの90%以上は外分泌を司る細胞、特に膵管の細胞から発生し、「膵管がん」と呼ばれますが、普通、「膵がん」といえばこの膵管がんのことをさします。内分泌細胞から発生する特殊ながんは「膵内分泌腫瘍」といいます。

膵がんの症状

膵がん、特に早期の膵がんに特徴的な症状はなく、比較的多い症状は胃部や背部の重圧感や不快感、食欲低下、体重減少などですが、こうした症状は膵がんでなくても起こるものです。膵頭部にできたがんの場合は、総胆管を閉塞させるために黄疸が出現することがあります。また、膵がんができると、糖尿病を発症したり、血糖値が急に高くなったりすることもあります。

膵がんの診断

診断は他の消化器系のがんより難しく、発見が遅れることが多々あります。エコー検査を毎年受けていても手遅れの状態で発見されることがありますので、エコー検査で異常を指摘されなくても、症状が続くようならCT検査やMRI検査を受けることが大切です。それでも診断がつかない場合は、口から内視鏡を飲んでの膵管の造影検査（ERCP）や膵液の細胞診（膵液に浮遊している膵管上皮細胞を顕微鏡検査する）が必要になります。